823
M1&N2

岷江入楚

槿

20

Freer Gallery of Art
Washington D.C.

槿

三十一歳　内大臣

九月斎院御服後桃園宮給ふ　女五宮同宿給ふ

源氏参桃園宮給ふ

先参女五宮御殿次参斎院御方対面宣旨給ふ

翌朝折槿送於桃園宮斎院返

源氏西東対遣斎院宣旨語給ふ

紫君前斎院御事ニ恨源氏給ふ

十一月又桃園宮参

源典侍候桃園宮参為尼対面源氏ニ　七十一許歟

斎院御方有人伝御返許ニ

十二月在二条院与紫君給ふ

雪囲ニ

昔於中宮御前作雪山ニ

与紫君物語人々上共給ふ

故薄雲女院見源氏夢恨給ふ

槿

以歌并詞為巻名

源氏
見しおりの露わすられぬあさかほの花のさかりはすきやしぬらん

朝顔
秋はつる霧のまかきにむすほゝれあるかなきかにうつるあさかほ

秘
此巻以歌并詞号せり源氏卅二歳の九月より冬まての
事見えたり　孝見

孝
宮門大将薄雲の同し年也

斎院ハ御ふくにておりゐ給ひにきかし

河
又桃園式部卿宮の御服也おりさせ給ふなると

花
槿の斎院ハ桃園式部卿の御女桐壺帝の御時斎院に立給ふ

秘
薄雲巻にハ父宮の御服によりて斎院をおりゐ給ふ

薄雲巻まての末ニ式部卿宮うせ給ふよし見えたりあるへし　斎院ハ

河海ニ延喜帝の御子にてはしめ准擬の例あるへし

一代ニ一度かはる也　斎院ハ二世御身に服あれハおりゐ給ふ也　代始ニ

はかさる所也　是斎院斎院のかはりめ也

孝
此巻ニ斎院と称せらるへし　槿の前斎院又桃園式部卿

女五宮之事　致仕大臣北方也　薄雲女院也

たゝしまいめおほしもえぬ御かたちなれハかと　河 辟死

源の御かゝりなれハまたそのよそへり

文かうりしけれ　前斎院

源の御さまくらしこゝろ給ふと

いとらうたし　打とけたる御すかたをとくおほしたち

長月になりつゝ桃園宮に

秘
おりゐ給ひて先代御事にまうしつく後にも　重服にて御よふ人に斎院と桃園の宮に移り給ふ

とみしより桃園宮と今は仏心寺云跡也　新
河 大和物語云 桃園兵部卿宮うせ給ひて御はて九月晦日なりけ
けるにとしこか北の方によりてなりけるにて
大かたの秋のはてたにかなしきにけふはいかてか君くらすらん
二品式部卿宮敦固寛平第四皇子母同延喜延長四年九月七日薨
拾遺集に桃園に住侍りける前兵部卿屏風の哥之
白河のたきのいとみまくほしけれとみたりに人はよせしものをや
桃園在西一条北大宮西一条西中御世尊寺南西時枇杷町欽
師氏大納言宅也保光中納言代明親王男 傳領仍号桃園
中納言 今案敦固親王是欽延喜帝御子枝 并九月薨逝甚支
桐壺御記云延喜二十年六月八日兵部卿宮子内親王自病中
不病困篤及暁出院至太宰帥親王桃園家九條右丞相記天
徳三年二月十三日桃園家ニ廃云云城家 式部卿為廃殿云
条立小對南之北對早晒去甚仍取改作也
女五宮そこにおはしける時は　源のおとゝ　秘 式部卿宮の御むすめ也

そなたにつれたるついてに　桃園宮へはとふらひことはなくく女五宮へ
とふらひつけて参り給ふ　源のおとゝ
前斎院にこなたこなたより　秘 前斎院とハ桐壺帝の
今はさうしく　秘 源しきりにも大切におもはれける事
女五なとのおもてを桐壺帝の御ことにおほせらしく前源しきりにと
源氏の御まきらはしかりし　次こと
秘 わたしをとりよせ給ん　少 君のおはしかと言へきこと
同しさうんてちんのおかしかりけん　河 西ノ兵部卿東ハ女五宮
秘 桃園の宮のむかしは女五の宮のおはして
程しめくおほくのれのかたさし
秘 式部卿宮薨し給ひて程もへさりけるにおほくさひしき宮なり
右宮 うちつけまさりしさいの梢に葉もしけきまふ紅宿は宮なりけり
式部卿也　少 同しく式部卿宮と云なり
宮のいみんしゅのそく　秘 式部卿宮に云へる宮へへきりたる
の男とも寝殿に住まるにおはし
いとふかめいれたる宮なれは
河 氣色 日かけ 形勢 ありさま 未詳

旧 嚔嗽(こハつき) 女五のみかひんかし ねさ給なりけり
ありつきかゝるに
おのかにおいはれと志太とのゝ宮あるを
旧 紫上の母ハ三ノ宮桃園の宮ハ女五をさしてものゝこと云り
秘 三宮と紫上母宮と此女五宮ハ兄弟なり 旧ハ源氏かくたに女とゝ
もてなれを契りてゐるに 女五宮のさ候と 旧 大(ふうか)
式部卿よりちかりてとハおもはれに似ぬといふ也
秘 ここに似合ぬ御ありさまなし
こちしくちかり 旧 ことしくちかり(チトみ音通也) 無骨なる也
何かれかこなり 少 紫上母宮ハ源の古姑なる也 細と別のへん
鼻頭の方にうつくしき 秘 乞食人ハ摂政なる小方よりかうあり
たなやうなりしくおさんなりしくて此女五ハうすうすにかうたのしく
てんらかしうへもはしぬれとさうかうなりといへかまゝや
性のうへかゝれなうく後 秘 桐壺帝とて 女五宮の詞と
秘 桐壺帝 女五宮は兄弟なり
此宮女さへかく云ぬく 秘 式部卿宮と桃園と 女五の兄と
かくさらりり 源のとふつひのふつとを

うしろもゆり猶つかうか 秘 源の内侍のうちまことのかれとし
のかりいうきをとらめりて
ちかうしこ侍りて 源の女房へ懇勤なりかさ候と
性かられなりて後 秘 光より源の詞と
おる世の風にても 兼てあ世界にめたの指ことあり
たかくぬけをより 秘 源氏のこと
秘 光ぬ罷とハ身にちてぬ罷といふこと
ちかくおかやうに 秘 此宮し御りくて又政なりに源な者とと
それもうりとしうに宮にてけあきまりてぬと
久しく無音ぬさ候と源の御しりに詞と
いとゝく源まうしく 秘 女五宮詞と気分かくて源氏の移しあ
とあるに尼女御しいかにしれとこ
いれうるにつきてとも 新 桐壺帝崩御以下源氏源氏ナリ
そうりのみあとのあのと 旧 老子曰寿則多辱
気あるさまのうちしき 秘 源の立値にしてかくさるへきことを
くるくせにありかゝり

見人御心ハ又気高のさもいひあつかひやうによ御心とと
こなたの所しくてあるしかハ　気見んしうくて源のさうくおかみてと見ん
おしうらハくらへとしうらんとと
いときよらくて　秘 さし向て源をかゐあねと　少女の又さうに
おのかへとりと　紅梅ちら向て女御つりさ后なと治とより
ちらく去りたりといひらなよらか見ん
ららハよ哉し　源氏の幼みれ時のうすと
時々見なそてまうつりことにゆし去り　あまりの世よ無せれんと
おやうくこゝろ行しけん
門の人のんハとよく似給へり　秘 冷泉院源氏よよく似給へると
行りとしとり　秘 源よハおとらり給へきとそしいうりうちと
なうくしと給ふ給へハ　同 長こと
ことにくわしむらいて　秘 源の御中と
山くつよ方りて　秘 源の御としよ女御との御やうつまと
うら北所のくうなる　冷泉と
あるや義所ありしハうり　秘 さうりとしてとより給へ人ともみ返答と

けくこそありしか、ハ　秘 女御の御こと源をけにくみなりしくきれよりしこ
いとしきこ気色のひ給へん　気色もさぞとこゝろにくく気色延と
又おもひのよ　女御のうわなりきことなあり
こえちくやさしく　同 桐壺小方　葵上母
葵上の母宮を云り又女御の宮れことと
さう心されゆかりなれハて　弄 こえ源氏とむつふこと
源と舞おなく今よそれゆかりよ去りしきつると宮よこ
このうせあひゆかし　岱 うせ給ひゆかハ式部卿宮のうすと
兵部卿と源氏よおつきなり宮ニおとらり給へ思しとこ宮よせん
とせられくるあいりし、とうりあて
秘 式部卿宮こ　模の兵部卿と源よ嫁しさ手よしニおとらり給すと
すうしみてとしゆりあよ　源の心と　秘 おの物語とよにさつにつき
たゆりしよ世一言よいさしろ再とし給あて　弄月
ゆきさつハなれおまらしかハ　秘 そてしゆつハう行しうりくさうし
兵部卿と源へゆかし給ひて嫉しからんとの心と
られさうしもあらせ　皆しハ女御のうすとさこあらくいつと

秘 ふはうしとくしく〳〵ちのまへとりつゝ
あなかしこれ侍まへと　秘 御随身のかうこ
えりんし給つゝ　今みかりのつかりに従さんとて源のちうへつ
御くらてとたかやく立ちかへ
かくさつひさり　秘 源の御心
御かうくすのこより　私 武御随身の御よそひりとは随に
私 是のこハ舎人是のとハ舎人なと　舎人可然也
よき公のみ是にある若ハ丁の是随けれ　抄 服かの衣の舎人
足りつゝにいみへ公の布をも中には是き八丁ハ丁の其男
御かりあふしく[illegible]とて也なくさひらいころせも御いなる
私 昆上も服もうつにりくあり
是のこハあかりてけまいはい　近し舎人舎人なる随身
せんしまたいめんしく　秘 御随身の宣旨と
抄 御随身宣旨女房ノ事也 武御随身宣旨とハ東宮の宣旨なと
随身中人へ女房中宮の月しるし
抄 御随身宣旨よりかりの宣旨を請れしに可見

私 中宮東宮なとハ面て也きの御随身なくて御所近くの人は物
かくし侍るかくまし　今ハ御用心すといいつくへまいる
久しきとも其後ある御出とあまり不せん　出ると[illegible]
御せらるはいきころに　抄 御せらるはこハの御ふ抄[illegible]
私 あなたのちも忠岑々へしかりとは相ともとて御せらるに
今の御はわけしきみなの花のあ[illegible]
を御りのよはひしきとうかの[illegible]
私 是の事とハ源ハ[illegible]　秘 舎中へし入の[illegible]
に居給へハ母君の御[illegible]の花なるへし
年の衣と[illegible]にと[illegible]ぬなりちつ[illegible]
ふしくおほえ[illegible]
秘 源の公とうけ[illegible]
御さひにかとし月のうつ
久しくなりし　乗円
抄 久しくなりにけるを御[illegible]とハ[illegible]御随身[illegible]
是ハ御さかりハ多より[illegible]
抄 御関　又神宮御関雅　日本紀　後拾遺集に
こそうけれ衣の[illegible]の御さひよそうかまての本来よ

今案ずるハつかとハ宗字なりけれバことへハきさらく宗なりけし
ゆかしき也。宿（旅）の字も古めかしき也。可叶を後成六百番
歌合判の詞にもゆかしくこそといへり。慶長の也。見るべき後者
歌合判の詞に古今の歌詞つかひなりてさらにて其仲
又弥紙なりぬるなり。もろもろ宗家には剱刀をとりてさぶらふとハ
いふ事は文にも頻々日本紀に宿雨宿霜とあり。是ハ
宵の夜宵の霜なり。古き也。又毛に宿鷺毛などいふなり
古今集の物名の歌は後撰に紀友則 歌合鐵ノさしの武蔵（サムル）日

今ハ門かもゆかさせ　　門かとあり
なる門かの流あしきなくゆかさん給りんといふと也
われハおもし　　涼の海もあらずおもしろし
わりし世ハさる歌にあらして　　歌にみなして　文字のなし
（尋）歌詞舟路の時人信
（秘）門よりの返歌。舟路ならくおせしるなとハ久しくなるなと
秋又哀をもなりて舟路をもおりのへハいまおとろきぬる旅の

なるらく極ハ色つか方ハ皆歌ちや何か今歌さらくらなる
ごがあり向ふとといへバなれし又ごが宗もうき只ととなか中だと
極なりし世ハ皆歌とハ源氏物語にも歌を作らしつかとし月の
流りりさるとこえ川をと皆歌そとおかしく名あへし
らしなどハあつらりや　　（秘）ごし月の方なるとは思ひあらさ於ても
をかしくそ作らぬなりとき　　（必）源の名主以下何なりも不実なると
人しまたは弥の中かしと許しまりよきぞらつまなき世とあるとなと
（秘）舟路ありくとらし月の末ににかとハいりせのとうひとも涼やかを
それとハ知らぬにもおりりといふを弥の中かしとハ旅のなるなり
こくら所になきとハ涼らう何所にもなくもなり　みな名なり
名尋なとも義門仍曙し

今ハ何のいさゝめにか　　何弥のいさゝめなるのと
（秘）さハうこ涼をのむべきかなしきなりへし時節をねくなとお
わしきの物をとらと
（尋）舟路おりる旅へは弥のいさゝめもありしとと

よしさらりしきつるなり　弄　須磨へはわりしきなるすなとこ
秘　須磨へはわり給ふ事一ちはつきう御しきこえすりしあはれのなとゝ
私秘に云にはかしきつるのゆあきといふかはあはれさはくなり
やうめへあはれしとは權ハ秋悲におほし須は須けはかなひ
なと此後ろしくおもひつゝもあくさもめかなるをあはれなるにおもふ
ことのみてなりけり流りゆくかなり
いろくさりうそよまま　秘　人へ流るゝなみくちをちやのみこ　弄月
流るゝりいなと　弄　須の月らんとかこ
さる所へいひかつりらし給へとも流浪のかなしきにたえしなき方なり
同　秘はいとくしうたなり
秘　さらしかるハ秘はらしうしき流浪のかなしハ須氏ゆゑに門たえこ
大臣なとはいふかしとけらるゝ小さもかけからぬまに
るなりけるところのおとく秘はるしかるといはあうりいまこかく
せきさ方御しつやふくと沛住のかなとよはあはれなどいうと
秘　須の宿直なと具罷しくある給へとし住よりハ年ころくらへ須とさなと
弄　須氏の住よりハとしころくらゐこ

歩みつ乎枕ん
なくへて世の行へ小斗ととつこに枕らしるすと非やいさめらん
同　秋悲の流浪するに去るれ在の哀をやうけりたるにつきてわらあるのか
秘　秋悲の流浪なりし世中は小斗をいひかりしのふとし非は若ちか
ゆゑきいは流きれらやのとかちらしるする小非は三倶といふ給へなこと
りしまうにゆきしの〳〵まとと常因に云たかるなら
弄　なくてのの世中ーとよふやらし非やいさめんと秋悲のよりとのこ
あなむつそのよのつとハ　秘　須の村こ　弄月
そのよのつきみなせかとの風よ　秘　せなとの風河海よりよひより
同　そのよのつきとハ色つかのかれるやとせなとの風に打て稜はさくておとこ
枡下集　流さところハ科戸の風よまうらせらりさりほそく〳〵ゆかん大海ちりよ
東西北風とせ風土の風と云結の不祥とを吹失とよく中臣稜云
科戸風　乾方ヨリ吹風也　天之八重雲を吹払ふことし先代旧事本紀云伊弉
諾尊曰我所生之國唯有朝霧薰滿之哉乃吹撥之氣化爲神號
謂風神也名級長津彦命次級長戸邊神
弄　せなとの風中一書稜乃村同神す用い結

あはれやうしことよろし　源の説さ同じ
みそれたと称はいいて　師 意せしめらるてさ据称はらけれとも
人をおもうしたらんかりしととて
秘 弟へは清まし此門かと思しこ人云うしは死浪といふなるを　秘 弟月
意せしと手洗門よせしれ桜称さうけれしなりにな皆れ
今葉わりし世の花は皆まれとの風よまたくらうく語てらるく春
作れと意せしれれ桜は称しらけ語りれ河らんいまさ月なり
作りらしめるへし　私打れ桜と称はらけれとも彼もつて面白
ちうれなとし城きこうかりし候めなつるはいとおもさりけへし
源のうやうにちうれくいかる心を横め倒う多いりのふうくうち
らけわさ後たりれて実めすかなそくさりつていうきやう屋と云うや
よかうねれるさ後は　拙なれ住人る宮き称こ
秘 此秋流は人へよかりりて人へりないく方こはさよりし
人そてまうりなるぬり　秘 さるつぬ人こみんなありなやし
秋流ころうくの由りわるりと女房なきれいうしと云る也
を紀くしきこやうになりゆりへと　源の説ご家事のるすを言ふ也

秘 今夜は人のまふとするとおもりしてまちのみこと
よりいの流りりよいさとて我く社
秘 かく不さる後むきにみるしと面白しかきとこと恨くう詞
世よきる後屋流れと今そとたま　弟 源のうつりんかへう幻なり
師 伝右相説 君か門今そてちら行いてしりんよ意をもかく人のなりりもそくしを
治 や川ましもてうさとりんとうり語へくきこうく後わしきことなり
秘 君か門んそたし　せめくみとうり語へうしとこ
私意もうかく人のなれ皆もうさととりふなと云まりけちてよた
もうわや流れとの語へり今そてちら行いてしみよとやさん
面うしなきかと物あてわいまつひのまふと恨めしき詞
西せきまうくきいのきこてしわそへり
源の説よかくんつとめうくさりしこ文蔭雲れもて秋好れ此方よりり
めつか説のうつりきまとのるすをゆくまいのといふこと　秘 九月廿日なること
大うされ定もたりしき
とかし拙の不らんとりへし
むられはりとのるすと斎院の女とてれおもりつかるなり

秘 宿直よ御出の時やつかりし随身をも出るおりふしに
私秘ノ説ハ御達のあらしるさるゝかれこと云之いはて出むかへよりけり
源の説ハつくやしくひめしる事を御達の女房ともの出る
あるへし
扇やまいらせて手ちかいつて随身なとは
らくみうしまいらせさく　格子とおろし下りまいらせよとて
紙なとおもてくゝ家の様なるへ　秘 花は源の氏なる
をはかゝなりし　白あさかほの日記　孝 九月有けり　撰字也
孝 以下源氏よりの文の詞
秘 文の詞とは源くも安置所にさめつけしおしなきやうたりけるに
らんけるこさるよりもおさめて御物とさんけるは流りてあるしの
面目あるけれとも又打置かるゝ事
源 みしおりの露をきりぬ紙かけ置のさうりはあさゆふしかしはん
花式アに姫君よ紙かなりけるのハかてきてのおさまよみくさりて
連を見しおりの露をにつ乱れなといふうの御乃こ　何日
秘 源のあけたら入をまり随身もとくは前し紙かなりけるは第木
きよひしるすとて其外のこともといふ事也　下句の説ハ襟の色ぬさう
ハ従なる袖なとあらけれとおもりハ随身へ（きよし）なりけり
まて過られるなといふよしなり
孝 花のさかりハ過やすきなんとハ源氏御返事をと云詞（白）
私返事なりといひもとなくて家へ説面白し
年比のつらきし　所りとしいふ也　此の説さし此程ハおもし
きりなんとつハ家ふと云文の詞なるへし
かいはとし
秘 私かいはといへるハ心をいはんとおもひなんとこ云花の家云
とかいはいふといふ（家説〔きかん花香鏡伏撰〕白）
花 かいハ家身のおとろへしおりハきりさうといふはあさうかの
残らくおりはきりかうてうありなりのをとなかいう
御文のうるさくとハ此説をいり
とおもいうれ文の説なるへ
私会のさ夜のまくよりうのゆへよれまりとし随身
おかつうなかうんし　あまりなくハ源のおかつうなくさん
数くらしめ

延権新注
秋くれて霧のまかきりむかしをかへらぬものとなきにけりかな
秘
源の御むさしむさくのおりにそとりてあそひしかと
下ノ句霧のかひもなくてよみけるにや世にありてたちかへるとは秋の部
入りて云心はさらにいふことやうに用いるよしにこと
秋部の霧はよろつによりかはりゆくまくし
思しらるゝ心も秋しるよしに霧のまかきたるにはよらぬかなきかり
かくれはさらに秋のかけのさ夜をとおもひいかりける也
秋部のさかりはいまもありなんと源の霧の心ふかくよそらにむかしをとく
ゆくく秋しるよしに霧のまかきにはふるよりなきかたりしを
いる秋のかけのさ夜をとおもへとたりける也
よめりし歌なれはよろしく　新注は是わりは知と
家秋のかけはなかき我ならむ根をはかりもなしきれよろしくとは新注のあそふり
よ昔のかり霧ふかくとはれ思ふよりのうちにあたらはれて霧けさ袖をとるらか
侍りし　秘本には思ふかのうちなかに豊原の裏のほりしとる
よろしくらんぬ哀たりかたし々をのさかりはいまもやあらんとあとと
家霧はおもろくはなさ夜に似つかりしきとれはなし侍と
家
さかりはいまもありなんと云心にてみえなかしなく霧ふくたまと所〻
秋なかりけりけらしかひかは新注には猶身とくへりのありさまにま
はきたくし夜とも霧なかくはをみとなり
なふのかりしき　秘いはくまもかりしきぬしのおもひさせ
さ様なれはれ小刀の歌なり
墨にいのちもれたらいかなる墨染さりしも
服衣の用の服のあと所日　墨染さはしとも侍てふとはのあると
人の御かとの御ぶくぬぎ侍りける日　家菩提の紀と
秘
菩提子地はかりに僧正なとく人のかたくよ思ひたまいて　所日木綿十日カ
おしきかすむしろあかそのおもりは奥ありとおもひ小す　葉
侍りさうしてなきにける我世の前に世にこそ出し後よ侍り
それおもひは涙とあきにるむしにてきしつつまこと白たえのひもとけかのふかいゆかむ
としわかれはてて侍りしらすよりに又まもさうりしつつおもかけのあはれるも
ともかくりけり　秋人の袖のかさ夜などに侍くらかれぬたう
れおもはつらなきにうりしうもとをさうりなくも思はいくのいつれさ夜な
とにさくさうしうりるりしなきしらくかゝなりさりしとさてたまで

さうまつ〇ひかれハかくゆかしむすてしあはれハうてて夕を切（下し落き

くさうまつ〇のつまをかうゆかしれなすゑへ（下し也）ともる宮方なり

りのくゆかしむこともくに法華かなりてりまつ〇ひかせよハゆかし

るすゑそ也）光りの源の作者の心也）此上孟　又さうしらなりつき

まなりりしておほゆりなきつすをおかりりきりりとハ源の作

よかりゆかしむすあはれハてそ作りしたるくよりきこまつさらりし

ときこうかねよおかりつるなりるすおかりしとも）

ありつくり今文なり　源の心中也）

　　秘説とハ細おりぬやうりよさひいのへとことも）

りくさかれぬ作者のしきなりり　弄　秋花の源氏なり一也白）也よ

よハりくさかれてて文なとハうりし添ハぬとも）

さろくへ足て　孟　作りうもとよ立ちりてても）　弄同

ありんりし此ゑハ　孟　二条院の東北對也）　弄同

　源の作のふうこなりくへし

せんしとむくへ何く　孟　秋花の室宮也）

秘　源のるういのうても）

作のつ故人てれ　秘　秋花よさつつ故女房也）

なりひまつやまてなりのたりとハあのまゝらし　源なりれくへまとをいく

（下かとの心ゆつき女房なとハ此源のるりとよにかつめてこそ夜

作者とも）あつやまうらしとハらなつ下りりさしかつらん程よおりふとも）

文ハそれうことうつよ　秘　源もまもらしりつくましれ時うつまも

作れなくてもおよりのもとなり

非もおりひなうか（き　秘かくし源も作らりひしらうくらぬ木とい

よつくさひたなれのつも）さひなりうへきとハうやうしれるりなりけ

のよ（きるりつとあつれといよつ心也）

たつれきこ木草のよつもこうり　・風流かつれ文なてよハ法なりなとて

ことくへのなつくさくやとりなしたんとたれとさくへなりしく光也）

姉りつてたなりしさ夜　心中也）

くやうりよおなりしさ御よつ逢なれつ源も心のと御也）

よれくへようりめつうしくも

秘　うく心のつき所よ源なきめつく心をとしめるても）

世の中しよりりきこてこく　孟　世なりりハくてよう紅葉あはひなり

かくれてあることゝ
多いのうへにも　　秘 かくされけることゝ
ありしハけりとてさゝやかなりけるハ見えてそれにハ
　紫とハ世の名めとりけるをうちのへとこしさゝやかなりしかるを
とも家にハうらし給ひしとありしをさりけり　なり
明石のうへなとこしより給へりしもさなかりけり源のうへ
ありせ給へハとなりけり
うらつきなめとこし給ふ
かたみし黄なるとし　　秘 源氏　源の物語しきのけふうかれたる夜
ありくらひ給となりけり　　　紫との源の上佐にかたと思ひかたこ
またくありくおほしめうらん一ことを　　　　かすとうし　かさ
　秘 三東なりとこ家のもきうな給ハさ佐とこ
つまなくかくりけれハいひなし
おあかさらに　　秘 紫とハ式部の息女こ横笛文字れ給ふなりけり　兼日
　も 紅皇の笛吹ハ源氏といふことありくちしまゝなるおもてすらと
ぶりしかたならぬるありくハおかれたりと

秋風ノ筆不審此りの給文章のうちと日本らと校合たり
むかしよりかんことなく　紅皇とハ源の桐壺帝の紫の宮
おきのうちこ家つ月し親王の女なりくハおかれしこしとうなれ
よりおかしすくらといへと
このひるりく給ふ　　源の物語さまを桃花の事なり
　左東ハあらひ給しとそいへり
人よおしきわかれんハ　　秘 紫との家方ハとこしけさまうんとこ
とし比なくうちなく給ひ像に人よ名をま人ハ一人合らおかりく二三の
うきなしかこらりたの黄さ夜よハりのし給ひけること
　是も紫の名とよそ一の色をもえなりくたしく名おかくハおかれしとそ
あかつけしきうちよ　　紫ハおさなくより別のへハ公やむごと源
　従り給ひんとこさうて紅葉の舞楽とハおかれくしくりくなし給
りていうかれんはらんとさたうにかれなと
よ給しきうちの給　　秘 なの紙さりかうるのそてこ　並日
うらえしなと　　　　そとしさうるのけそおりいてくうらみ給ふとこし
　給へ是ハ実よつくおほせ成のんさうぬるかなうくおいせすかこ

たゝうくおもめらるゝよ　源の内侍あくうつしにまうさせし事と
うち源をしきたく　見し人のかくつくしにまうさせりし返
面くとはれんへと　（注）後見とりて見とくとくるすを侍つれ柄に源の声めして
（秘）内大臣の後の後にはひとへとくるすとしめて
（注 後指）秘まうくれおりけしなりし者の昔の萩の古枝を後と焼なり　和泉式部
なま人のことはむかしの御まゝしき
（秘）紫上の母の人のけふはいかなきにとこ
（弄）人のかたとことは文肥てみなくとしてなとの散し
古しれをしに　（秘）おかろはよしもとせおはしまさかを紫上のうら
こふきになれり　秘此藤紫上れ母なり
名の方ゝんらさるとしてとあらく　（注）那 日本紀
（秘）藤宮在よ十一月たつれにし弥すもし停癈せらるこ　正月
（弄）落雲のれよ桃宮なとの叢によりてこ
秘弄桃宮家とにかはらよし落雲れるなよ讃宮に
私いのちうゝき参り　櫃へおとつれさぶらふ女房へ参り給へは
ちゝつき参りとはおりしろくうれなせり

公よいふらん人ありこいふこと　（弄）檀家の臣公よりしゆかり
あけりよ　源の者へいと返らいこ　（注）辞見　日本紀　イヒコ
女五宮の　源のまうけりの祝と
尺と面り給さんに　（秘）紫上こ　めとあ人合せぬこ
こゝの君をとりしくあそひ　（秘）明石姫君こと紫のさ合こ
（注）姫君をとしおさる我おとはワの君とやしまうつれ内ろかこ
あやしくれ宮りしきのかりりへきにもおつとしるしや　れ宮わしきのか
源氏祝と何もそても身よ覚てしうりつとしおし
りかなるあやしきとなり
（注）済この本まれ後やきこ夜なれ説く
こたなれ宸の本まうりめなれ
うとくれこしても本まりうりなれ　（秘）弄月なの同こ
私あまりうらきていくいめつくしかりしとくくちとらさ面を
こなれもえなふとおかれおかれ宮わしきのけしきと全を
とりかつこ見けくうらすこれこなきは空しうり
なれ御くとうりせ給後こともおもりそれは　（注）かれ好は源世おれ後の何まれ
後やきこ夜陰とやかうん　（秘）紫の祝り出図こ

秘 ねりやき衣といふはなほしの事を川しくろく用ありおと
しろき組と源の御事と説あり ハきことをよみ入候ハヽ後世あり
きるしとうらみてうたと
源のうしろなり
みゆきて出させ給ふ
源の女のかへおはしたと皆く六月を給し
あかり給はせさせこ
いうかれよ出ゐまて 弄月
・紫上の心と
かりけるかしも玉けり
弄 一説紫を紫草を
出ひさうけれそとしあけれハ
源氏君孫宮よりてみいふ紅衣を着あつかん
秘 源氏の衣裳をさうり絶服あけれハと
そいつしく 源のれさ夜と紫の君出むとて
夜ちにうきちさう 秘 紫の心と比ましにうき給でいとこ
芸實よかれのいてハとあつかしくおほをとこ
れせんなとの志のいはうあ侍 荒疏なしておほくたる心を
かかり佐とみしくりしんくてよ相新をといひ寄せのあり
源の御心をうけ分くおかんたかるへし

門よりうかゐわりき 源の組と 六条内よりかのあかりきに尽ぬう
もれとて武のかきとうれのかく心もよくてかけしなりもなき
あと名残を近く出ゐる時に尤し桃園宮と云うかたに
女五の宮と式部卿宮は桂殿院の御文 桃園式部卿宮と
いそれ候き心 秘 御あつかしくていふかこ
源の御ゆめへとしも御佐の心をれ好色のいまさこあるたまりてそいふなり
うらしきこなりやいそうえんとりうと
家よハ北おりくゐん志けきて 秘 女五宮と
秘 桃園ハ門のうなれハ桃園の家とさしてこと小門の雑人
のおいてあるの門なれハくかしとくれといりて 秘目
桃園ノ宮の西の門と
西のかさこえくし侍
秘 西の門より入ゐよへなるへし
家の西かさなり 女五宮の御れくへし
なつかしいわり給ひしと 秘 今日ハ営みて御れハこゝろみも
弄 東より方にはしかひとのあとを
みかとをもり 河海 閽 カトモリ 論語 和名 閽 音昏 守門也 和名に加度毛利

うせづきいくさうく　薔昧出来　秘 ことさましき給と
花 世俗よう語ふかうあとりふ也
孝 さとし本う給と　花 うきこれたりり夢と
ごかくとひきうく　秘 此語をとりきり
まかうれいとりうくさうしく分れハ　河 何ゾ歩ヲ馬蹄生易蹶
用稀所鎖澁難開　白氏文集
あられときこうしめす
きのふ行ふとおもひれかとことせの行あつて馬も今りふ行日
まさ表紙本みそとせのわあさことを　私 弟ことうそとせ花じたる
秋ハ源氏五宮式一とも一家男此日今日此よこりくとさまちよたや宮式宮
さこうふ為わりとあを飾しのきしそ見んえと拵う用らし　天之三九月修と等之義
少 三十とせし源式下たし飲食し是表紙し常此文にハことせとえ
私 此義別ちかは此々源氏作者所信々他ノ説不用之 然ち他ノ
抄 ノ義與ニ紀加之
河 毛詩曰三月ニ不見況ヤ於ニ三年ニ哉日自須广帰洛四年也
花 源氏君廿七第須广より都へ帰りのふとしハ式下とし侍

式下年あれとことせのわかさとうち宮のハ大うさ久しき事小八こ
ことせとをうれと私久しきするまことせの程あさとハ以旨之
孝 須广より久しり源しく須と源氏式一年ノ分可紀歟此宗作須臾
年と 桃花あれハ今年まくれ分之うそとせ々源式一年とし改在
なされ語らへあかりことせたと用へし
本条此文ゆるを分とうるを　花 猶見とりきくあとまふ分よいふり
私 をうち義本条ゆるも分をとらしまうし一さうゆをいふた
い河のまうよ遂う門とむを厚ま雪ふうかさとしわ形しう紀在て
秘 世の靈とありといふり
河 蓬茅為我庐編蓬為我门　白氏文集
蓬门蓬衛　文選　衛门蓬户荣门　文選　皆隱居之心也
面しくしういこまろい　门の錠のうきこいこまろひ日ハ月まろくこ
宮のれりこよまいの扉おうり　秘 女の宮と
そこまうとたり義うちたしめ　女の宮の扉をうりおさ為と
れんてしおとろうれ　須ハ様とうく々ちやくかさく花ヽ花ハ手再々こいきえ
宮わくひらうし　女五之　河 欠伸曲紀　新猿楽紀日

河 呪鼻 證文と

いひきこそか　少 女房のいひあへること　女房のいひされ有出れはさはひ

よろづいかゞあらいとく　おくよりまた老人のうちゑりよそさく

しらく源のあらんとし給ひて　秘 紙としむすび老人の御こと

又いとふるめかしけれ　秘 おほよそしかり

こと紫式部の御こと　源の衛とふかおぼす

うしこゝちしめしつつくらんと

此のうへなるおもえたとく

なおかりいつかる死おはしまの

源内侍のすけと　是より源の御中にふかう給ひてぞふかり

河 上﨟女房に典侍と云くは内侍のすけと云二字をとらしとらんの

君とは内侍のかうんのことなり

これなりぬる このはてしまうく　弄 源内侍のこと花ちれはいりよん

それ世のかきりは皆むつし給ひけり　秘 源の翔こ従なれんとて此代のこと

ちかうよゐつかいはかりし給ひそこさうよ　源の従れ比时を宜しく学

何よ一事代人へるおもかくむつしにあしく給ひて所よへうよ

おりしつかと女給けらうけしきことなり

此て　あれと出家の後は男女たゞ家人とて皆弟子と称スルカ

新のかしありしふせ給ふらんへ

河 聖徳太子道慶和尚所鑒山に飢外給へ御と御給へ出るの命

秘 家多は今はおもしかしとのまことをうれへて

（左頁）

家多は今はおもわしかしとのたまへふこゝろのまことにしもなちてしうら給へき

とかくわへしらいかつる源の仁怒の御ことつゝるおさけれさ放

うらく　月分月か　弄日

源内侍とおもてたとしと宜しくよ伴くおゝなしはたうくと給へり

との給ふは世俗よ母のかれ子となれ思ふおいはまうの御こと

いとむしおりひかりうる往　源内侍のさ御こと

ちけうにうらくらつきそい所ぐ所ぐ二八つくい

秘 老者の歯落くゆらちゆうらにはうさ候すや　そい所ぐ所ぐ二八つらの

いとは新なれ弥よく口りしめてしちからちるへを

うらさけんとい　秘 左孔多の御こと

河 いひうしかとし此分と　源内侍のいつかなり

秘 弟とらしとゆひらつ往よ今はまうの人のうへなうさらく　へさ衛

川分 河目　家多れとしのよりさうおとゆうらちれていまつなりと

光女のとしよりたるをいつはる人のうへといふ源内侍か家の
言といふたはふれ源のかくおほせらる絵ニ光女となり
（弄）一説源内侍のとしよりたるを絵ニ河海　花鳥
此前ニかはるといふ人のうへと光女の言の身のうへにかゝる
ならひにて源内侍か事をかくいへるなり
言は我身の後をもいふなりといふ
今しも来る言の返しには　・　源の也
（秘）今宮にも来る言のやうに源内侍は光女とも言はりとよりは
言なりの物とも　此方のものといふは太うなるゆへにすてゝ源内侍
の身は我か身のあはれといふ也
今さらなれしまはりなり　武業平のもちゐんとしたと云に源
氏の胤月は百とせに一とせたらぬと同し　也
これさかりにいとま給へ　（河）挑蹴　挑蹴
（秘）源内侍としさかりにはいかはかり人のかはりの女御更衣にかはしく心
とも皆たれかもおもひしといふなり
此の御代の女御更衣なとのうへと源の也にいふ出るなり

言さためなく　うせのつかさ
ちかきあたり世にさきにて　（河）さきてうへは熊りてあしくて世にあらく（…）
入る宮の宮よりはあさきゆゑにしくとのこそ不知なりし
（秘）鷹雲にいまもしく宮にある色ありて給はさなと云ありて世にあらぬなり
源内侍からくなりへ（…）
年のかと身のおもりすくなり（けさよ）　源内侍は年よりも末はよりは
ちかきあたりを云なへしあまた思ひきなとしくの人の気なりて
さとこなはなしくてをはこのおもゐるになりと
物わりけるのれ宮りしきと云ときめき　（秘）かく世中は不定と
哀と云もの（つ）のさてこなりと源内侍は家身なとを云もの人あと昔
のなとなきれさりかはへし
（弄）源氏のわりけるのよと源内侍狂むしの云ふれぬなるへし
私狂秘の義　（…）　（河）の義略く
源内侍はさ（…）
らうやく
（源内侍）とし物けともの契りてもてあそひもあるれ親ともいひし一こと
（花）おもおもしこいちもし　ゆつきおもの親とはこのりこの物りは

みよこと案ぞうろと
伝 おやの親とおもしハまし父とていてまし一家の子たちハ何れも
秘 親のおやとハおもてならしとよめるまし川向河よ侍し
祖源の相おちれなるの祢や源内侍のむすめしとてかいくへうる
かとやるくされけうの分ぞとのうとくもりし
身をとくく後も後をよこれなたにくくおやと三つるし歌ハおわりやとも
とも身をとくくハせをとくみこれにも子小を〱くうた侍と
秘 なくくさめるくれおけこし此世よくくおやとよりりし子ハ是れとて
多れりしき契りなるや　源の侍くいいくそらわかこし後の
世もまちれしと分よ行れハくいふり
あしおりくまハ　秘 歌道のはしこそなり
いとひはなくんしいりしごくく日と夜なてこりハおろされ
秘 三実貞女こいとひはなも志あり也こ　此分れハ面白し
月は出るくさすまうくよ流れわれ家雷れ出なり
たりし行きこ夜のさ夜なり
ありつる恋らくれ分を行くしけりくぬ物の為とハいときなし

伝 清少納言枕草子にて御しきぬおもしきのをさとり志ハまゐの月
東とこ　源内侍のもとへや私よつてつくいつりたりて又月さし
出るくとよよわれハ志くれの月東よなりくていつ所こしよりくて
めりのとハ十種の次平こ物をいれて河海よ枕草子よ冷物おる
あのをさうし志くれの月夜さく南浦流布…れ枕草子より此
なりし此たよ此なり河海小但清少納言の又元輔が〱
いさうくおりわりしてちん名の月東の歌よもとそうるらり
とるれ月をとで雲しうるもこ貞女の身としてまさまりし　貴
物よいハいたなそうんなりハいうしと見えて終りのめりまくこ此まてれなく
にも此なりなんしいり節も分月異なりは海よみえてしうり
祖此なり河説あかすの義に付るく枕草子よれなや花月あとしとみえてしうり
河海よたしりくよ出栽せうの礼さハ此は栽さ〱たる返し
をなるも此義よ月ちくさうりり又元輔か本よえれ月は霞し
古れハむとあれよ是有物よ冷をこ物よハ入るりしれと云も
志理なり義の本作のとふ小能をそくハ月し作者の本よもむうひ
とくハ紅葉ハおよりわかりしとようき　歌意ふなりしてな

恋をしのばりしと　縁語　花さき末の身を　恋を父への縁をし
身をなしくゝ貴にハ何事もしらはいりて又は我をもの来るに冷し
我独よいひなんとかゝりぬしき独よいひまうりの大ハ法
よをもりたりくし
こよひいるいと夜るゝるよ　　　濱の霙よふりむりと
ひとことにくしなとまし人へ成りくなりて　　花より濱の糸と
同後拾
今ハさしてうの縁なりんとハうりをしへ成りくなりていふよしとの
秋花ハ家居のりかたなる秋人々ニ家がゝくしうかたしんといふ
身をも恵よいひ家そいふ夕をこ出と濱の方ハ我くしの一と
をなりのとし人へ成りくなりて何りまハうれをうの夜ゆ家
みの花のりはせんとおりなれ実蔵しくうを深ふ
とこは家自然よおりしる
むりしまれし人へ立　　秘　秋のかれ方申しなり
扇文なとの方にせ　　秘　扇式紙や文濱ふとなしとおうし
世の末よ何ともこそれ　　秘　さうりをし皆方なり
何きなりふみかと　　同　在月　　定家の説

あきゆしらつるとも　　秘　古りしそじさハいさ夜のしめて
方やましきゝや　　うけそかれゆやまるしはよふうらいよくらう
なかき方れそよへをと方やましといふなりり　　一
我しいたりゆけ鄕よ風のそちいたましく夜ことよ
秘　緑の字よおもし　縁し
つれ花さう紙むりしにうりぬ方てそへの何うさにそへて何まれ
何れなる我ハむりしかつのうしそれよらりぬ家方々への
きよちへて何りしとこ　　西自し
方何りみれと　　弄　川家ふ卅
同伊勢物
むかしくいつの深の川にて渡とだちねこ方つりやみともりまん
いまりせるそのゆうりをとしなくうけ方何りやろうろうつきらん
中将
秘　言しきをも方つゝみわさになれてとも家あくりてそとふゝ
河海ノ家河事ニ御れをさうして不付たる家身れ方つゝと
言届ちりへ　河海ニ有ノ言ニハ中将宿ニ身とくと
をふきいうし　　秘　何をつら娘人々これ方こ
あまりつれなくおはせうの方と申新さ

匡衡 秋花
あらたなく何かは花にも人の心にはまてしと思しかはりける
思 人の心にはさらに昔と今とも色のかはり侍るはなしといふ心也
まことに家々にありては何かあらまし（さきとよみ給ふ也）
奇 秋花の色ものと何かはあるまじく人の心はさらにちか資根なるを
えんとよみ給ふ也
秘 秋花の色あるさま給ふとおもはるゝにあまるくはいろかはりて見え
そとも人の心ものつくさるにあらくつむ塔と申しさすれとも何
まことなるにも思ひしはしてらるゝにいふ段給ふの事なる也
猶自心いりけとありなむ何りて絵る末の詞にむつかしからすなり
はなりけれと給はり心かはりとあれは詞さなりていふなる
むかしにかはりけるは 秘 家はむかしにかはりけるはなう昔とを
さまかはんやうよえんし 源のうらうくいうなし
いと年く世のため 源の詞なり
いさら川 秘 りししのみなと
古 おとよ家の山あかりいさらや河はとこそ人しれて家かれもしれ
りりもあまりあまてる時かはさら川はとこそ人しれて家ありけれ

秘 綺語抄にいさら河とはいさゝや河水月光也武部清説川なとて
いさら川とかけりけれとも河海抄には拾遺の詞ともいさゝら川と
あそうりたあまり時あまてるかいさら川は此事うかたりし老
角家名けりにあれとさるへしと知へし
なれくしやとて 源の家名けりにみとのなまるまと
あけまてしはりくのなりにける
せちまうらさうゆんきゝうらい 老は宮方なとに給ふ（ひなかまする）
何すまゝあらん 秘 さらぬ人てまとものなかなり
私宮方なとにさためなきひめへと思ふなれ人の行すゑ
小かあらんとおりよみ給ん
くとしあかるしきる さらぬ人てのりに詞なり
あきりなかれあはれてひとなり
いかにもとりさせく 秘 源の給人のれ給ふとやよりたるをも
さらかとは源しきことさらぬ人てれいなるへし 奏日
きよ人のかとれおりしきまも 何すなぬ人てれ給ふとてそしらぬく

能々かれおかれし事中に源の此うさ夜の事くいふなく此事さし
わかともこミきこりことりとしおかれ事のおりさく院なまく
書事給の給よ見てさりし筆跡の負ひ事なりへし
さしなへてかよめの人へかなめくきこゆれん
(秘) 此名をみんきりさりさ夜よりくなきさハ昌名の人の給よ思ひ
なし給へきこさるやうにくハうふなりへしと給く秋好ハ思ひとと
(新) さしなへて源氏よめくなりのこともなしきのことらへなるい
なしと秋好ハ思ひ給へりとと
うけハかりのくさく　(新) 事の御かとし源氏のミ給りんをらうしとと
さるやうになりハうらくさこさと源の思ひし　おもとしめへしとと
なうしかりんなさうけしいとあはなし　(以) 無益こ　無較
どうろうりける給へくありへし
よ経の此ろうりなとハ　御文の返事りなとと
人給くれいれへさし返事うとく
まへ源のおりなり時も宣旨なとしく此返りとしれのこと
さし送きりつきり罷　(秘) 秋好ホくハ俗性の跡際しなきことにり

好はむにむこうさく給それうれなくなりと係のしし此なと
(私) やへといはむとくいきねなれハこれらくまむきく給そのられなく
選子内親王秋好ホくよりんの人へ俗となりり
(新) 秋好ホく時の事ありね経の事のこと尼よなり給りんの心へこ
(以) 秋好ホくハ縁なうらホく此おこなひの事のうりしこ
此おこなひとハ　(秘) 出家しのくへきことの事の御心へしけれ也と
人のいうしとりなさんとおなうらいのこと
中くいとあらしき　秋好の事へいやさしくもうそれ事と
今尼なとになり給て源の御りなうらに来てもいのへ有と人の
批判らくへきとの事きなこと
此つ終へよをうらとけ給いれ　源なとんに打ましくいり給なり
るすらわりんとさつ終女房よる事笠のこと
此もらかうれをうんなむらなりまふこ　(以) 秋好の此ならうりまへ事
よみしうれ京極よハみんしさうりなりこ　さつも丁給まるつれもなる
面の(きこ)物絵よ此歎おりし
(新) さとしのもうくはくもうつひあハぬなくへし京極ハみて給花おりしからはし

秘 栗尾よりゐてこしまゐらせける人々ともみえたるへし
日ころはなれつるなれは　秘 かく後なれたと
ちかく思されん人への　秘 源とさしていへり
さしはなるところも　秘 同しやうに源は宮とよませ候こと 弄日
岩 嵯峨の女房達ハ源氏の君と同し宮はなりとりのこと
おとしはあからさまに　左 是よりは源氏君は此宮のうちとさためしなりと
まけて所とみえんも　弄 源の宮帝本来は川の人宮御へし
なりのうへとおもとみえしこと也
秘 源の宮帝本にみえしこととし後ちかくいやせまし又人へのとみなと
御ましてと也とこのこと
さるまたこ人の御為猶にの思へくもよるまかりしく猶と源くおほきなり
是ハ摂政北の御あさ後を源の宮をとおもふへし
よの人のとありけり御ならぬとききてあるの御ゆくむつましよりもなく
ともあかすかたく御わかゆめ　河 猪目ケヒ　揚目ケチメ　剣イチこんこ
若あれまし源もさりなく　秘 源氏への宮を源氏しるくかせ
御らく宮ねまさかりけるこ 弄日

少 世をつゝみよきさうしにく何事をも切の入へきを
いまは何かしれあつけなと　河 化ス 日本化
むかしはかれは　櫻よりあかれたるこ
女君ハ宮のうへりかくて　紫上と也
河 わりなやとおもてたかいまのそて宮はふくさまても
思ひのへといとうらこなかて
あはしくもいふかな　秘 紫上の孫こ
ありし世涙のふく後　秘 源の何やとしとかなと
秘内はさうていのやかすことに　秘 源のことりこ 夢雲こ 弄日 左日
おとれはかんへと　源の仰せうきとさしていふこと
まうしさすら何かといふと　岩 源は住しはかることしれくらにそ 秘日
いよくそむきえく　紫のさ後こ
いとわくわかいのうかは　又源のこと紫ありけり
宮かなりしきこし思ひかそてとたく
秘 ふれしそおさえてうかりのもとをくなり
つ〇なま世よりくまうく　定なま世なりよら何のかれを歎く

うちさ夜こそ又暑とせ多くいふへくあるに夜なれ冬ともいはしとあり
涼さ夜ありといふし
秋近きよるの何しこと
そのつくはん膝ゐて居ん
むかしより来るあり
平しこそ涼しくあり
まめくしきさ夜
くらかれのとしと
秘 夜涼く涼のいひ出しあつて
されはますとは行末自然に見ゆへきとし
秘 秋近の涼の事
秋近あり
少 実よ一家にかれんといひて冬には無りと
実に暑かるよもおかぬといふとして
くもくは暑へからりとさんをいへそらこと時雨のとかとやうの
実るりあるりは涼の方よりすしみ名をせめて
新 涼とよきるあきかすかにしもうへきかいは涼のまりて
松と竹との涼しかんおかしう
秘 涼くしるれ雪のさ夜と
旧 貞松歓歳寒と云なと松竹月あるこ 十八公栄 雪霜凌露
一千年色雪中涼
少 松と竹と雪の涼りやうなること

時ま涼冬とくし人の冬とらいて
指 暑秋よもりされくまきの時すゝけ涼くらる冬と 貞之
冬れ夜のせめる月あり
旧指 いさうくてありけりしてるん冬れ月暑の涼よりもとうらくさうりけり 元備
秘 たりし涼き夜こ 端よくらし冬ころせり
涼りりきふ冬とあるとしいうくらは雪れらへある月とこきさらん
寒陰のかよあ涼しりやられ冬なるへし
とてもしれ冬めしよいいおきもらん 旧 清少納言枕草子
十列冷物 十二月月夜 同扇 同蔘水 老女 假粧
女餅 胡瓜花 法師辨舞 冬酒神楽 勅使被出開競馬
崑崙八仙畫舞 賀茂貝紀むかしの色月の涼月いとあかれよ
めつらしきあかとへつくあかせ涼まじきれの月夜なるも
おかしといはれて 暑ともいひ冬れにのりとありける
かれ月なりそあれなれなりき
㞮 清少納言と紫式部とは同時の人なれといとこわきに冬に有り
まかしの月夜清少納言は冷しきものとこそ と式部は冬なる事

ものゝ名にしむと云り　今これつれ〲に清少納言か枕草子にみえたり
きりしの月夜と云付句也　是本歌なりといへるか小町か野花
よわみと云義なり
私云枕草子にさゆしきりのゝしらに急く　以上評
うちまゆきにつけさせのち　　句 遠山ある梯　頸枕継　香炉峯雪積
蘆香　示天　一条院の御時にうつせ香炉峯の雪いかならんと仰られ
ありし清少納言御簾をあけ御覧けれはいかさまにもれ蘆と申て
あけてけりとや仰くたり
雪ゆるりし　句 雪国　應和三年因十二月六日令右清門
志然為称為則擁雪作蓬莱山於女房小屋今日切牛賜為則
及益取雑色役者三人緑有差
さゆくいおこゆん　評 一動童はちさきとき何れとそれとも
ゆこさくあこかとこさらに所なや
秘 うへよりさきをときうりくさを夜あけまよりゆく男ししうへし
おひたとけふきとのみちようさ　秘 傍のうし旅へし
評 同 今良 常にはげれ常のるりや　一動とのゐたまさは宿直の際に

出 かくはめれとのゐせし御しはちそうこ　句ノ結男こ
出 ちいさきはらくはまうく
出 竜気乱におさなけなりとはし　草出物語よりと此付なり
秘 おさなしなさ御に竜気乱におさなきに見よ思しあまりし
あふこさあとうしおとしつく　句 女房は式には色とうけて用に檜扇
秘 何の色も扇と用し俗めかしこさし扇は色し用にと古れ式と
うちとけつか　秘 女の扇をおもるゝは面とうくさんてあこされ付扇
あとこおとしてうちとけうる
ゆくはけれしと　秘 力をいれて大きにゆうつさんとせうる
評 力をいれさるやくしゆ　貪生　遊仙窟　私貪ヲフクツケト訓スト見
名り貪ムサホルこ貪欲ノ方こ大キニ丸うさんと欲念とおもしろこ
うくへのくへるさ　傍ヰまとうくへのへと云と
出 此雪まろうしよくりてはてくこつて
云りとあけよ
一と世中一文の旅前よ雪の山　出 此中一文は蘆雪女院こよりに掛
はてうりは雪山はむうしよりをみわとらひうさなりとらつこ
又出山院清冷殿のおわ前の庭に雪山作りまつて後久へ待し

すハ小右記にみえたり寛和元年正月十日のこと
河
桃花の宴ハ花の十余日なと雪いふしう詩をつくり作文
式部卿宮へ宴あり是れハ花と冷泉院にていひし事ありて雪の山
作らせ給ひぬ侍ても花の宴の題ともつくらせ給ひし中宮に
も弘徽殿の花の宴に作らせ給ふ京極殿にも作らせられしとかや
是にのこれる也と見ゆ雪の山なとつくりにけるか那
此雪山長保二年長保二年のあるとし此の経寛弘のころ
まハ一とせとなけのなし又雪山にハ花人小毛省水やとなく
山をはしめ作るの雪とおもはいくれとなして
弄
薄雲の巻にはしめられたまふなりけるかなしと語り源氏物語とく語
みつつ中宮ハ薄雲に雪山のなり河海なとにもかくつけり伏見
後伏見院永仁のころにくハしきなりとて結番の記録なとも見えたり
花人の花をつくりとして河院せし秘
ちりかさなりと
まし〳〵とあり
帆
ちりかたなりとちりかくれて
うしろやとなりのまハ
源氏をと公やまもりて薄雲にお知

東宮にしかとれのみつこ
借あまたともつしるすもえ花葉加賀のうへ
りくいてて薄らかくしまこととし
をやうしきこと云ひせいのちいさきこと御身とやかくしきと云
帆
とりあへてあはへて帝ハまかり出もとことし
あり〳〵てしきこと云ふ
帆
とりあへてやらく
ちりかきすりともしちかや
薄雲ハ更衣よりも内の時も源の
河
皇后
日本紀
弄
花月ちか
いつまても薄雲の御とさま
秘
紫上の御事を薄雲付
君下さきハ公と紫のゆかり
とそなりさるむつきめことといふり
む
紫上ハ女院の御めいなれハゆかりこそ知れるすこし
そらしろつらりしき
よくしされ
弄
ねえんしき
花ハ薄雲にも紫上ゆかりこそ知れる御
うら花のそこはころつらりしき宗のうとく志手とハ見て様の
まゐとねえんしのなとをかりかれのかの御めへしかとく
去さの行くむとハさしるてうのかとさくしされしてうる

萩の秋風の下おもへ　秘 是より横の秋風のたよりとのよし
是ハ月しる須磨なりし又藤壺なとくれハいりくるとし
あこれなと申てる　今これなとなとも人へハこれ日なとなるとし
ねなしといひあはせんとこそ思ふといひせよ何しなとなるを
おりしのうきすてハらすしくまて
あすこたちかたちりてくたちれ侍　秘 紫上之　紫の所に当給ふて給さハ
あつまちなとりてたれ侍る人の所を何とやうれしくて
ことありしと思りとなくのゝしなるなり
うらやくしきこさなとハなりましくとあり
あやしくも見なりけるゝと　秘 源と名をそれかしの高家しきさくと
あり　秘 源の後と思ふよ紫上殿とありあやまりけり
是ハ源氏の返答とうんの君よ名をなしるゝを語りのこと
こゝろにくき女の　朧のゝし
あともおりふいと思しく　弄 源氏大臣朧月夜のこと
秘 五人後悔なきましても何給のうそし悔なるに会せん人へし
うらあるもうなきかる人のそしつるり所ましに

源の好色よありしとおりふさくへやうれ後悔なましくて
さてこそし好色なりの人ハうよりやうのなり多くへとへのこと宮子
人よりハこよなき後しれぬと
山さとれ人へ紀
人よりくとありくへきこ
秘 是より明石とやかんとくのゝなり
秘 明石と交作の女なるやとぞり　弄月
明石とのうへと源なうりのへとおりハあくれ所さ夜とて出
あとハ明石とハ人へかとおさなましきく人なれハ忘るかの出居
さ夜と源氏のこきのとの給へると
少
殊のよりハこひありけるるこゑれし案りさうしるとさるやうよハなく
不弥人へなれとて交作の女なる源の忘る何しせましてくさと見ことし
秘 弄ノ義叶へり給へし
いよいよひなきハれ人ハ何をこみて　秘 源の道のよへ人のうらあさ
のこいよいひなき義るれ人へるなけ後とこれうち給へきとこそよ
人のまれなりとなり
あんてし此説よ　秘 此義異之
さりとさ何かあり　此人の指なのハ見えてるれとこ

さはりてさよけもんくの分ちせひとにをりて
さりやうなるくへしるぬ地なりうへんそめしにりおもかけもやうに定
分よ清まししきなむなりなくるりすハえなきましきこなりとかむかこ
今ハうちつゝり　秘 此人のやうなるハなきうつれとも
それハ泥やゆかすやとそしくなりしれんとこ
氷とちいしまの水ハゆきなやミそらすむ月のかけそなかるゝ
秘 南庭の称ハゆりまゝちうとあやうしなくなくれしさうなふこ
つんさしおりやう　紫の髪のかゝりも面ハ下こ
空さこゆかしくの　秘 薄雲こ 藤壺ノ日
いさゝかうつ分しとりにけり　この ゆりしなくしとける
花宮にハとりつきて入道宮しとける　日花なりこうなて源氏君
の分もうかも分もなれとし　秘 りとより紫上とをさしのまゝ又あねく
泥分としれのまに又ノ氏分なる分又くしうくうかれなこ 藤壺日く
秘 横なとく此歌おくなりし分しとりくへさ海かしく後
悔なりのとこ
源 かきつめてむかし恋しき雪もよに哀をそふるをしのうきねか

忠 うれはめくハゆきにおはぬめてこ昔空しくなハ薄雲此女院まれ
御ゆすよまいはかこ雪しりに立る雪の夜こ夜しりに前の夜こ
一說雪しりにハ雪りょうかしと云詞こ新古なり
弟のも木も源まうくうの雪しりにの方ハ催分に叶へ所よや驚の
う義称ゆ驚ゝの聲對の清方と抱然しのへ東のうしこ
奔 とけにの二字絶ゆすやゝ似分まかし分ゆやうしよ哀ゆりの詞こ
乃思惟ゝ文東又催ゝ
秘 うれおいめてこ雪しりに前為ニくるし藤の紫上とむれしま
しきこなりといへり
度夜なり入なまひて
秘 薄雲なり
秘 夢ハくらこ薄雲の紫上によりて給へし
此ハ後世罪障して也かんへし
源のさそりなしやうかしめふと紫のこは
入のひとくとも
宮の御すを
もらさしと
うらしきぬへを
女君のこハ帝とし
なとのゝまよ源の思うしおとろきなりて
涙しうりれ
夢中此源こいらしくこ日をしくとハ夢なかりゝ

たやくさしかりとおもしむること　さかんとし源の出家こ

いまもいかしうぬかしそん　源氏のゆり

うらもかしろうく

秘 朱上の志けまりさうら海月ならこ又源氏ぬるりとと秘ハ女君

いかなるりありかとおほやふとしうこ切とくうらしらし給うく

うしめうりとなくへし

源 どけく符ぬ柿覚ん三りしきをの夜よむとをほかをつ夏ぬぞしさき

秘 今いさしく病をもやうりんてつかぬをとこさけて符ぬハ産をぬ秘こ

さとハあくこく　藤壺のれなとハあくてこ

あとよれる秘　宏 花宴の源ぬまれ補秘せらるゆ

河 延暦元年十二月壬子勅太上天皇国忌御秋亥今月七ヶ日

宜令天下諸国今分二寺僧尼奉為補經具　後日分紀

くりしきめ今世のよもと思をも　源の宴遊のゆりれとこ

そこかいをとしみ　藤壺ぬるもし

此世のよらりとと

河 法花経五濁悪世劫濁屍煩悩衆生命 伊行云

ゆりくおもしきとものに　源の台中ニ参てあるこ

きりのへきせといよおりぬらんやとうつくいかにもまちらくて

河 伊奘冊尊火神を生とて焼ころさされて黄泉国へいまたれ覚を

伊奘諾尊帰りておりしきりなこ

人とうおかれし侍へし　源の藤壺ぬ給ゆのたりとあれうちあし

給ひてへ不審あらんへきこ

月よも御台のおこ　秘 更上僧都の語りやせし後ハ源とか

ありけなくしみのあまよりく侍りんめて

弄 更よりあの俗夢し中に源ゆりよりて若よ源氏を示くし

給ひし夜よいよいく藤壺の事など思ひせあはしと

かさね給をとふよりきみく念しまり給ふ間に蓮ふとてそよ

河 一心不乱　阿弥陀経　一さいしなしあるみえてりよ云とあむ

蓮のとよの分ぬれハあし　一今池中蓮尽満華上総是往

生人各留半座葉華葉待我闍浮同行人　五会讃

源 なき人へをきうみなにおまりせたくしうをうあくあれ物ゆるまよとなん

河 ら河せ川をあうまたへうりこ　三途河なりこ　伊行かきよハうをあね

たゝのせうやまとりんとあり不審

秘 いつやうよきといて好物のとき一ちせ始る知られとなり

ミ河せ河とよむせうり

寿 三瀬川よよせく顔三のよみれ瀬ハ三瀬川よよ渡のとあり

今おほ正捨うりり公閑とて

瀬うやまとりんとおもへるうかりけることおの筆かへきれ